

栃木県産のトウゴクヘラオモダカ(1)

野口達也*・青木章彦**

はじめに

トウゴクヘラオモダカ (*Alisma rariflorum* Samuelsson) は、Samuelsson (1932) によって、サジオモダカ属の日本固有の1新種として記載された植物である。その3年後、澤田武太郎 (1935) は、神奈川県で本種の生育を確認し報告している。しかし、トウゴクヘラオモダカはその後、日本国内ではその多くは、サジオモダカ (*A. plantago-aquatica* L. var. *orientale* Samuelsson) や、ヘラオモダカ (*A. canaliculatum* A. Br. et Bouché) の一変種であるホソバヘラオモダカ (*A. canaliculatum* A. Br. et Bouché var. *harimense* Makino) そのものとして扱われてきた。最近になって薄葉満 (1986) は、本種の種類学的位置と正しい学名について考察している。

筆者らは、栃木県のサジオモダカ属を調査中であるが、すでに本種が栃木県内で一定の分布域を有していることを見いだしている。

本稿では、栃木県におけるトウゴクヘラオモダカの取り扱いの経緯と、現在までに判明した本種の栃木県内の分布状況について報告する。

栃木県におけるトウゴクヘラオモダカの取り扱いの経緯

栃木県関係の植物誌や目録等におけるサジオモダカ属の取り扱いの経緯は、図1に示すとおりである。これらの中で、トウゴクヘラオモダカの名が見られるのは、生物学御研究所 (1962) が初めてであるが、この時は変種扱い (*A. canaliculatum* A. Br. et Bouché var. *harimense* Makino) で、備考として *A. rariflorum* Samuelsson の学名が付記されている。そして、その産地として那須郡那須町の北条が挙げられている。また、栃木県植物同好会 (1968) においては、トウゴクヘラオモダカは、変種扱いのホソバヘラオモダカ (*A. canaliculatum* A. Br. et Bouché var. *harimense* Makino) の別和名として連記されているに過ぎない。生物学御研

究所 (1972) に至り、トウゴクヘラオモダカ (*A. rariflorum* Samuelsson) は、初めて種のランクで扱われており、その異名として *A. canaliculatum* A. Br. et Bouché var. *harimense* Makino が挙げられている。また、その産地として、那須郡那須町の北条、沼野井、廻谷、那須郡黒羽町の大谷が挙げられている。次の生物学御研究所 (1985) でも、トウゴクヘラオモダカは、種のランクで整理されており、那須郡那須町の御用邸本邸 (移植)、ひだま谷地、山梨子、戸能、下落合、河野井の各湿地及び倉骨の産地が記録されている。

小倉洋志・他 (1989) には、トウゴクヘラオモダカ (*A. rariflorum* Samuelsson) の産地として芳賀郡馬頭鷺子山、芳賀郡益子町高館山が挙げられている。なお、この2点の標本については、筆者の一人の野口が同定に関与している。

調査方法

栃木県内のトウゴクヘラオモダカの分布を調査するにあたっては、表1に示すような本種とヘラオモダカとの形態や生態等の違いを考慮して、1/25000地形図上から本種の生育に適しているような場所を選び出して現地調査を行った。そして、本種の存在が確認された場合には、その証拠として乾燥標本を作製し、ラベルに詳しい地名と標高を記入した。標本の情報は一覧表にまとめ (表2)、それをもとに分布図を作製した (図2)。

表1. トウゴクヘラオモダカとヘラオモダカの比較

	トウゴク ヘラオモダカ	ヘラオモダカ
生育場所	池の周り・ 谷津田の側溝	水田・休耕田
開花時刻	午後2時～7時	正午を中心に
花の大きさ	大きい	小さい
葯の長さ	1 mm	0.5 mm
葯の色	褐色	黄色
最下の花序枝数	殆ど2	殆ど3以上

*宇都宮市東宿郷6-7-10. **作新学院女子短期大学

考察

栃木県関係の植物誌や植物目録等に報告されたサジオモダカ属は、ミヤマヘラオモダカ、ヘラオモダカ、サジオモダカ、トウゴクヘラオモダカ、ホソバヘラオモダカの5種類である。

これらのうち、ミヤマヘラオモダカ（1931年に中井猛之進によって日光戦場ヶ原で採集され、その後栽培されたもので、学名は裸名）は、薄葉満（1986）により、トウゴクヘラオモダカと同定されている。しかし、この標本は大場秀章（1986）には引用されていないようであ

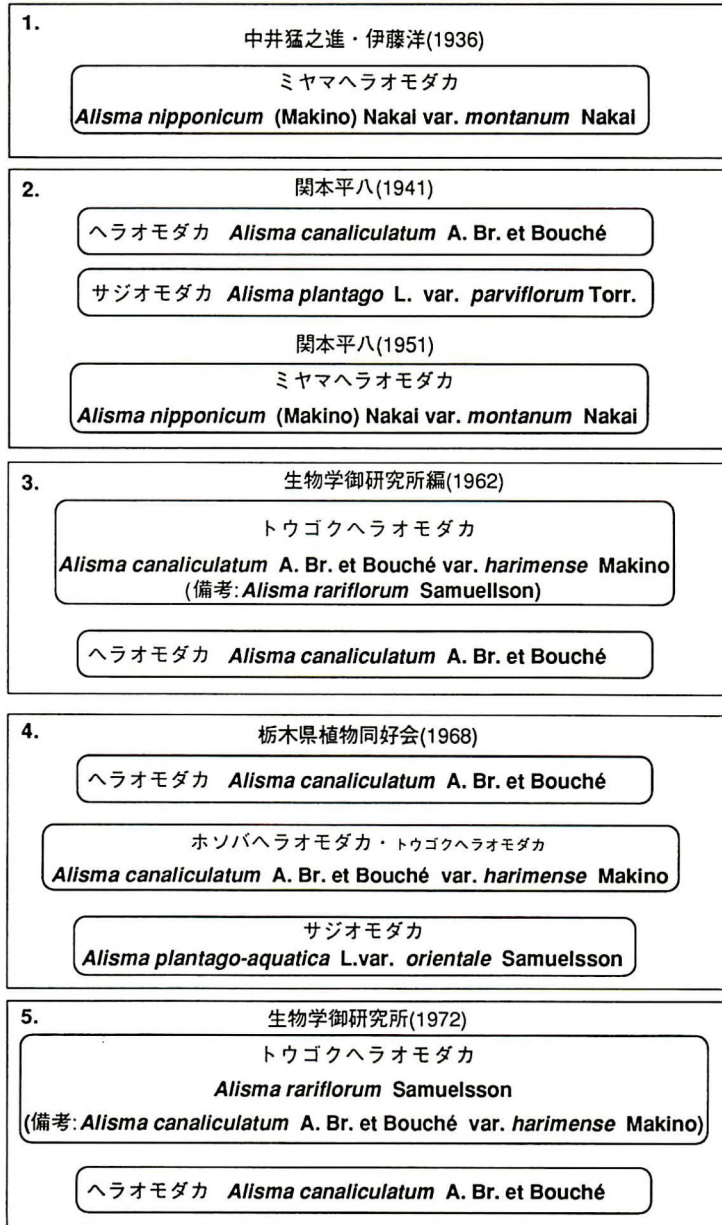


図1. 栃木県におけるサジオモダカ属の取り扱いの経緯

表2. 栃木県におけるトウゴクヘラオモダカの分布

採集場所	1/25000	採集年月日	標高m	採集者名
那須郡那須町高久丙・北条	黒田原-3	1980/8/5	470	野口達也、小倉洋志
芳賀郡芳賀町芳志戸・台八ッ木	仁井田-2	1980/8/24	130	野口達也
真岡市上鷲谷「井頭公園」	上三川-1	1982/9/18	90	野口達也
芳賀郡芳賀町唐桶「唐桶溜」	祖母井-3	1983/9/11	110	野口達也
宇都宮市鶴田町「鶴田沼」	宇都宮西部-1	1984/8/15	120	野口達也
塩谷郡喜連川町河戸新田	矢板-2	1985/9/15	190	野口達也、安嶋隆
芳賀郡市貝町田野辺	祖母井-1	1987/8/3	120	野口達也、佐藤光一、田村幸男
芳賀郡益子町道祖土上	真岡-2	1987/8/24	120	野口達也、佐藤光一、田村幸男
那須郡南那須町森田	烏山-3	1988/8/8	120	野口達也、角野康郎、内山治男
河内郡上河内村宮山田・謡辻	下野大沢-1	1989/7/23	230	野口達也、田村幸男
今市市手岡	大谷-3	1989/7/23	245	野口達也、田村幸男
今市市柳戸	大谷-3	1989/7/23	270	野口達也、田村幸男
芳賀郡市貝町多田羅「多田羅沼」	祖母井-2	1989/8/12	98	野口達也、佐藤光一
那須郡那須町豊原乙	那須湯本-2	1989/8/14	540	野口達也、佐藤光一
宇都宮市長岡町	宝積寺-4	1989/8/18	140	青木章彦
宇都宮市山本町	宝積寺-4	1989/9/2	150	野口達也、田村幸男
宇都宮市飯山町	下野大沢-4	1989/9/2	270	野口達也、田村幸男
芳賀郡二宮町阿部岡	岩瀬-3	1989/9/5	70	野口達也、青木章彦
芳賀郡二宮町三谷	岩瀬-3	1989/9/5	70	野口達也、青木章彦
芳賀郡益子町西明寺	真岡-2	1989/9/5	100	野口達也、青木章彦
芳賀郡益子町小泉	岩瀬-1	1989/9/5	150	青木章彦、野口達也
矢板市片岡・玉田	矢板-4	1989/9/26	250	野口達也

る。

サジオモダカについては、葯の色が黄緑色であることや、花序の最下分枝数が3以上と多いことなどでトウゴクヘラオモダカと容易に識別される。しかし、サジオモダカの葉身が卵状楕円形で、トウゴクヘラオモダカとよく似ているため、葉形のみでの安易な同定では、トウゴクヘラオモダカはサジオモダカと誤認されかねない。例えば、「栃木県立博物館自然部門収蔵資料目録(1)維管束植物(1)渋佐コレクション」(1986)には、サジオモダカと同定された標本が3点あるが、いずれもトウゴクヘラオモダカである。また、筆者等は今回の調査を通じてもまだ、栃木県内でのサジオモダカの生育は確認していない。サジオモダカは、関本平八(1941)や栃木県植物同好会(1968)等に取り上げられているが、トウゴクヘラオモダカと誤認されている可能性が非常に高いので、生育が確認されるまで、今後の目録からは削除するのが望ましいと考えている。

ヘラオモダカは、形態的・生態的にトウゴクヘラオモダカと容易に識別できる(表1)。ヘラオモダカは、栃木県内では水田や休耕田を中心に広く分布しており、増加の傾向にある。

なお、ホソバヘラオモダカは、トウゴクヘラオモダカとは別種とされるべきものである。

トウゴクヘラオモダカの栃木県内での分布は、現在までの調査では、県の中央部から茨城県に近い南東部と、福島県境に近い北東部で確認されている。那須地方では、春から初夏にかけての調査で、若い個体を多数目撃しているが、乾燥標本を作製するに及んでいないので、今回の分布図からは除去してある。しかし、那須地方はトウゴクヘラオモダカの多産地で、例えば、生物学御研究所(1962)、同(1972)、同(1985)には、那須地方の多くの産地が記録されている。

まだ全県的に調査が終了したわけではないが、栃木市を中心とする県の南部地方には現在のところ分布は確認されていない。トウゴクヘラオモダカの生育環境は表1にも示してある様に、溜池等の池の周りや谷津田の側溝というように自然度の比較的高い場所である。このような場所は、栃木県の南部では非常に少なくなっているが、ミズナラの生えるような自然度の高い側溝でもトウゴクヘラオモダカ存在は確認できなかった。県南部には元来分布していなかった可能性があるが、結論

Alisma rariflorum Samuelsson

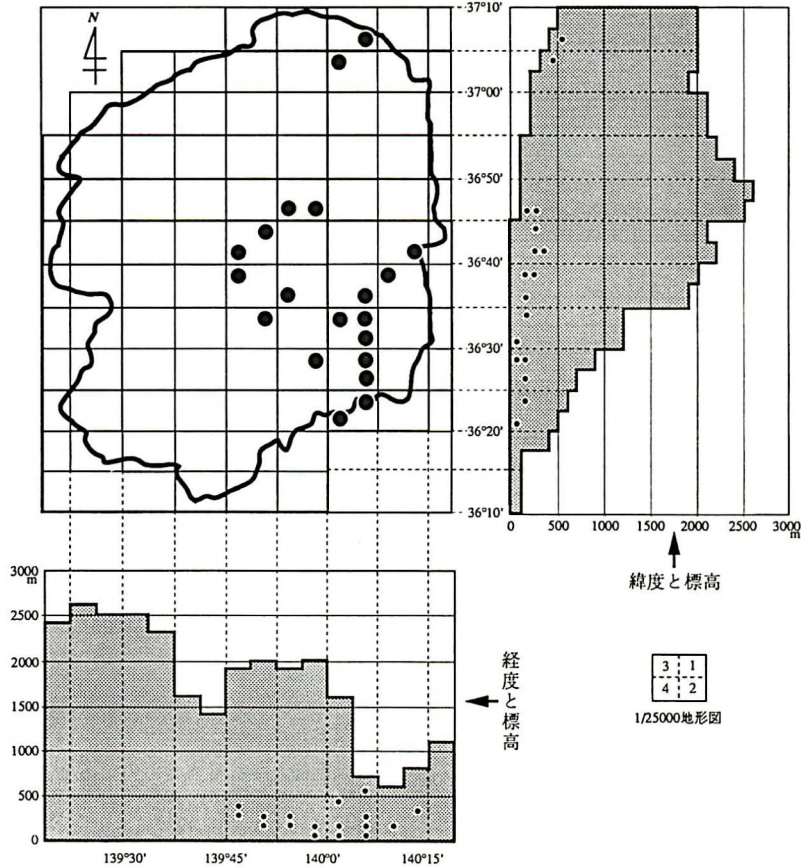


図2. 栃木県におけるトウゴクヘラオモダカの分布

は今後の調査を待ちたい。

県の西部から北西部にかけての山間部の調査はこれからの課題である。

おわりに

近年、栃木県内でも開発のスピードが加速され、自然度の高い湿地が急速に失われつつある。湿地は人間の生活にとって生産性の低い場所とされ、真っ先に開発されていく。例えば、日本でも数少ないタチガヤツリの自生地であった河内郡上三川町の磯川湿地（未発表）は、20数年前の日産自動車の工場進出で失われてしまった。もちろん、そこにはトウゴクヘラオモダカも生育していた。

宇都宮市内にもトウゴクヘラオモダカの自生地は数箇所ある。1989年夏に宇都宮市長岡町の長岡百穴の近く

で、新たに自生地を見つけたが、1989年冬から始まった国道119号線（日光街道）のバイパス工事で失われてしまった。そこに生育していたトウゴクヘラオモダカの一株を、1989年に移植し育てている。この株は、トウゴクヘラオモダカの生長の様子を筆者達に教えてくれたが、本来の生育地が失われて残念である。

本報告に挙げられている産地は標本の産地として記録に残ることになったが、調査中に失われた生育地も多いことを付記しておく。

本稿を執筆するにあたって、栃木県立博物館の小倉洋志氏には標本や文献の閲覧等の便宜を図っていただき大変お世話になりました。茨城県立水戸第二高等学校教諭の安昌美氏に貴重な御助言を賜りました。心からお礼申し

上げます。

引用文献

薄葉満、1986. トウゴクヘラオモダカについて. 水草研究会報 25 : 16.
 大場秀章、1986. 日光地区高等植物目録. 「日光の動植物」(日光の動植物編集委員会)、228、月刊さつき研究社.
 小倉洋志・他、1989. 八溝の自然植物. 栃木県博研報 No.7 : 339.
 Samuelsson, 1932. *Alisma rariflorum* Sam. n. sp.. *Arkiv for Botanik* Bd 24 A. N:o 7 : 32-33.

澤田武太郎、1935. 箱根植物雑記(その三). 植物研究雑誌 11 No.7 : 522.
 生物学御研究所編、1962. 那須の植物. 保育社.
 生物学御研究所編、1972. 那須の植物誌. 保育社.
 生物学御研究所編、1985. 那須の植物誌続編. 保育社.
 関本平八、1941. 栃木県植物総覧. 関本平八.
 関本平八、1951. 続栃木県植物総覧. 學海社.
 栃木県植物同好会、1968. 栃木県植物目録. 栃木県植物同好会・栃木県植物誌編纂委員会.
 中井猛之進・伊藤洋、1936. 日光の高等植物目録. 「日光の動物と植物」(日光東照宮編纂)、p96、日光東照宮.

ハス田のウキクサ

嶋田 直哉

昨年11月下旬、千葉県佐原市営水生植物園を見に行つた際に霞ヶ浦、北浦周辺を回ってみることにした。浦周辺の耕地はその殆どがハス田と言う程、レンコンの大産地である。もっともハスの葉は枯れレンコンは既に収穫されていたが、漕スキーで腰まで入って最後の収穫を行っていたので、車を止めて水田を見に行くことにした。周辺が一望できる所に立ってみると、赤と緑に染まったコントラストの良い水田が点々とあった。赤色の方は、ハスの枯れた後に一面に広がった、一成体が十円銅貨程の見事なオオアカウキクサであった。しかし、私が気にかけて物は他にあった。緑色に染まった水田である。そこには、ウキクサ類がマット状に広がっていたが、いつも見るものとは明らかに違っていることに一見して気づいた。初冬だというのに濃緑色で厚みがあり光沢ももっていたからだ。サンプリングして検索しようと持ち帰ることにした。サンプリングを終えた私は、遠くから赤と緑の水田を見ながら、この水草は“浅田鮎”のようだと思ひながら帰途についたのだ。

しかし、検索してみると該当するものがなかったので会報に報告するつもりであった。その矢先、会報42号の「角野：日本にもコウキクサは分布する」を読んで大変驚いた。私がハス田で見たウキクサ類は、正にコウキクサ *Lemna minor* L. に違いなかったからである。

そのコウキクサの特徴は、葉状体は距離をおいて見ても、その表面が盛り上がっていて厚みがあるのがわかり、かつ他のウキクサ類にはない濃緑色である。また裏面は薄い鮮緑色で赤味は帯びていない。サンプリングした生品は、水温4℃の今でも常緑で越冬中である。産地では他にウキクサが少量あったが、ハス田ではコウキクサが優占種であり多産している。浦周辺のハス田や民家付近の水路などにも産することから、分布は限られたものではなく、「日本じゅうにあると思う。」(角野、前出)に私も同感である。

会員の方々も早春に濃緑色で“浅田鮎”のような水草、コウキクサを発見してみるのもよいかと思います。最後に、私がハス田を訪れるのと同時期に、角野先生がその地を訪れてコウキクサを確認していたとは何という偶然であろうか。(1991・1記)

○C. D. K. Cook『Aquatic Plant Book』(SPB Academic Publishing, 1990, A4 228p, 12, 000円)

世界の水草を網羅した本としては、1974年に出版された“Water Plants of the World”があるが、カバーできていない水草のグループや内容の誤りが多いので新しく書き直したのが本書であると前書きにある。本書では世界の水草87科407属を取り上げ、各属へいたる検索表とそれぞれの科と属についての記載がある。水草各属の概要を知るには便利な本だが、種に関する記載はない。(角野康郎)